

受けるよりは与える方が幸いである

学院長 嶋田 順好

2020年度の宮城学院年度聖句は、使徒言行録20章35節の「受けるよりは与える方が幸いである」という主イエスご自身が説かれた御言葉となっています。一度聴いたら忘れられないインパクトのある聖句ではないでしょうか。主イエスのご生涯を省みると、文字通りすべてを与えつくし、最後には私たちの罪のために命まで犠牲にして与えつくされた歩みであったことをあらためて深く心に留めたいと思います。

確かに「受けるよりは与える方が幸いである」との教えは単純明快です。しかし、私たちはこの御言葉を素直に納得し、受け入れることができるでしょうか。正直なところこれとは反対に「与えるよりは受ける方が幸いである」と思っていることの方が多いのではないのでしょうか。それは生まれながらに人間の本性が持っている自己中心的な傾向性と言ってもよいのかもしれませんが、それだけに「受けるよりは与える方が幸いである」ということを誰よりも真実に生き且つ貫いた主イエスは、この御言葉を私たち一人一人が心に留めるべき大切な教えとして残して下さったに違いないのです。

新自由主義の風潮が蔓延したここ30-40年ほどの間に「受けるよりは与える方が幸い」ということよりも、「与えるより受ける方が幸い」という思いが、日本のなかでも、世界のなかでも次第に強くなってしまっているのではないのでしょうか。実際、つい最近もコロナ禍のなかでマスクや消毒液が足りなくなりました。宮城学院は3月中に備蓄してあったマスク1万枚を仙台市医師会に寄付したことでしたが、心ない人々は、ここぞとばかりマスクや消毒液を買い占め、通販サイトで通常の5倍も10倍もする高値で転売したのです。そこでは「受けるよりは与える方が幸い」ということが完全に無視されてしまいました。とても寂しく悲しいことではありませんか。

「三方よし」という言葉があります。「売り手によし、買い手によし、世間によし」ということを指しています。売る人が儲かり、買う人が喜び、社会にとっても役に立つ商売をすることの大切さを説いたものです。もともとは近江商人たちの商売哲学でした。とても素晴らしい考え方だと思います。実は毎年スイスで開催されるダボス会議に集う世界的な企業経営者の間から、株主のためだけに利益を追求すればいいという企業の在り方を反省し、「三方よし」の経営を再評価する動きが出てきているのです。その背景には、国連が提唱する持続可能な開発目標（SDGs=Sustainable Development Goals）の影響もあります。したがって「三方よし」にとどまらず、現在では「環境によし」「未来によし」を加えて、「五方よし」にしようという人もいます。これまでの「受けるばかりを追求してきた」経営への反省として、「与えていくことの大切さ」への気づきが込められていると言えるでしょう。言い換えれば「今だけ、金だけ、自分だけ」と目先の利益を追求することにのみこんで膨大なエネルギーを使用し続けると、その行動が、これから生まれてくる未来世代の人々に多くの困難と苦しみをもたらすこととなります。だから、企業活動でも五方よしの経営に変えていこうということなのです。

「男はつらいよ」の第39作で寅さんを慕っている甥っ子の高校生満男君が、ある時大真面目に「人間は何のために生きてんのかな」と寅さんに問いかけます。すると寅さんが「難しいこと聞くなあ、えー。うーん、何と言うかなあ。ほら、あー生まれてきてよかったなって、思うことが何べんかあるじゃない。ねー。そのために人間、生きてんじゃねえのか」と答えるのです。

確かに人間にはどうしても自分だけ良ければいいという自己中心的な思いがあり、「与えるより受ける方が幸い」と考えがちなところがあります。しかし、このことだけは真実です。人間が「あー生まれてきてよかったな」と心底思える体験とは、必ずと言ってよいほど、主イエスに倣い損得勘定を抜きにし、苦しみや悲しみの中にある人に対して自分ができる最善のものを与えることができた時なのです。コロナ禍にあっては、メルケル首相が正しく警告するように身体的な「距離を置くことが唯一、思いやりなのだ」ということを弁えつつも、それだけになおさら私たち宮城学院に連なる者たちは、与える思いを大切に堅持しつつ、園児、生徒、学生たちに向きあっていきたいと願うものです。